

地域と結びあう学校

― 笠木小学校を訪ねて ―

聞き手 小坂邦男／小島寿夫

5月中旬、見渡すかぎり田植えを終えたばかりの田んぼが広がる笠木小学校（新潟市西区）を訪ね、甲斐年史校長先生と地域にお住まいの長谷川幸雄さんにお話を聞いた。長谷川さんは元中学校教師、民生委員の主任児童委員。笠木小には長く係わっていて「笠木ふれあいくらぶ」（注）の会長でもある。お宅へは突然の訪問だったが快く応対してくださった。

笠木小学校は明治5年創立の歴史ある学校で現任は児童数63人の小規模校であるが、1981年からの田んぼの活動などで新聞やテレビにも報道されよく知られている。1987年には文部省（現文部科学省）の指定研究で「勤労生産学習研究会」が開かれたこともある。

「この学区は昔からの農家が多く、代々のおじいちゃん

んおばあちゃん・お父さんたちもこの学校の出身で、笠木小は自分の学校だという強い愛着をもっておられ、老人クラブ・後援会（各自治会）・農協さんなど地域をあげて学校に協力的で地域と密接にかかわっている学校です」と校長先生は言う。

（注）「笠木ふれあいくらぶ」…笠木小の畑やたんぼの活動をいつも世話したり子どもたちにやり方を教えたり、係たちといっしょに作業することを楽しみにしている常連のおじいちゃんおばあちゃん12～13人のグループ。3年前に菊地教頭先生の発案で命名された。

田んぼの活動

校門のすぐ前に約1反（10アール）の田んぼ「笠木

小学校教育田」がある。これは地主さんのご好意で借りている田んぼである。

子どもたちの直接の活動としては「田植え」「案山子づくり」「稲刈りとはさぎ架け」そして収穫後の「笠木っ子フェスティバル」が全校の学校行事として取組まれる。田ぶち・普段の水の管理・田の草取り・施肥などは地主さんがしてくれる。

○田植え（5月）

一年生から六年生までの縦割りの12班編成、それぞれの班におじいちゃんやおばあちゃんが2〜3人付いて教えてくれる。苗はもち米の「こがねもち」、おいしいが収穫量は少ないとのこと。田んぼの周りは大勢の人が見学、お母さんたちはバチバチとシャッターを切る。楽しい風景がひろがる。

学校の玄関の掲示板（笠木っ子班活動）に「初めはぬるぬるして気持ちが悪かったが楽しかった」「低学年と協力できた」「苗がなくなつた人に自分の苗を分けてやった」「お母さんたちも田んぼに入つて植えた方がよい」などそれぞれの班の感想が掲示されていた。苗を植えるのは縦半分約5アール、後の半分は隣りの田んぼの稲と混ぜられないようにするためと稲刈り後のはさぎ架けの場所にするためとのことである。

校長先生は「今は機械化が進んでいるが手作業で行うこと、これは一つの文化として伝えていかなければいけないと思っています」と話す。

○案山子づくり（7月）

前年から保存してあったワラを使って地域のお年寄りの方たちと班毎に思い思いの古着などを着せながら案山子を作つて田んぼに立てる。稲の収穫後、あまりいたんでいないものを学校の廊下に陳列する。

○稲刈りとはさぎ架け（9月下旬〜10月）

稲を干すためのはさぎは地域の人たちが立ててくれる。高学年が稲を刈り低学年が運ぶ。稲を束ねるのはなかなか難しいが、おじいちゃんおばあちゃんが教えてくれる。脱穀はコンバインでやつてくれる。

稲刈りの期日設定は学校の日程や稲の実り具合、天候などの条件があるので調整が難しいという。

○「笠木っ子フェスティバル」（11月）

体育館で自治会長さんや老人クラブの方々、「笠木ふれあいくらぶ」など各界の来賓を迎え、第一部は学年毎の「学習発表会」、第二部は白を5〜6個並べて餅つきが行なわれる。おじいちゃんおばあちゃん、父母たちが大勢で子どもの姿が見えないくらいだという。ついた餅はきな粉餅・あんこ餅・汁餅にして参加者み

んなが食べる。

〔作文〕「楽しかったフェスティバル」3年男

：（略）第二部はもちつきでした。もちつきはむずかしそうだなと思いました。でもやってみたら楽しかったです。ほかの人たちもがんばってやっていました。お父さんたちやお母さんたちががんばってもちをついていました。二年生や一年生は大人の人たちといっしょにがんばっていました。そして、もちができたあがつたら、食べられる大きさにちぎって丸めました。おさらとおわんにおもちを入れました。その中にきなこやおしるを入れればかんせいです。みんなで作ったおもちがものすごくおいしかったです。

畑の活動

グランド脇の細長く広い畑に、生まれ月でのたてわり班「〇月生まれのうね」が12畝と学年毎の畝が6畝ある。学年の畝は学年独自にトウモロコシ・カボチャ・トマトなどの作物を植えるが、たてわり班の畝はジャガイモの収穫後に大根を植える。

畑の活動は田んぼの活動よりもずっと以前から行なわれており大根を作っていた。2004年、校名と同じ名字の笠木典子校長が赴任。大根の収穫後の畑が草

ぼうぼうとなつてゐるのを何とかしたいと長谷川さんなど地域の方に相談、翌年からジャガイモをということになった。畑の活動は原則として昼休みなどに行なうので希望する子ということであったが、今ではみんなが参加して水くれや草取りなどをしてゐる。

畑を耕すのは、元自治会長だった田中良喜さんが毎年のようにジャガイモ植え前と大根植えの前にトラクターでしてくれ、畝づくりも「ふれあいくらぶ」のおじいちゃんおばあちゃんたちがしてくる。

4月、ジャガイモ植え。種イモは高学年の子が「ふれあいくらぶ」の方に習いながら切つたのを低学年の子といっしょに植える。5月下旬、芽かきや肥料をくれる。そして7月にはいよいよジャガイモ掘り。

「あんなに小さかつた一つの種イモから大きなイモがごろごろと付いてゐるのを見て子どもたちは驚き、大喜びしてゐる。農家の子が多いが、直接かわつてゐる子はいないからねえ」と長谷川さん。収穫はかなりあつて子どもたちは家へ持ち返る。小さい子が両手に袋いっぱいイモを持つてゐるのを見ながら「お前そんなに欲張つて大丈夫かァ、帰る道が大変だろうが……」なんておばあちゃんにからかわれる子もいる。残つたイモは給食にも使われる。

その後、9月に大根づくりが始まり11月頃に収穫する。大根は、学校の近くにある「みのり園」（知的障害者更正施設）にも届けられ、入所者と子どもたちが歌や簡単な奉仕作業などで交流する。

毎年1月の第2日曜日には老人クラブが中心となつて「さいの神」が行なわれる。昔ながらのトバアミ（1本の縄にワラを連続して縛つたもの）を編んで、積み重ねてあるワラの束の山を巻いていく。この行事も子どもたちは大変楽しみにしている。

「とにかく、お年寄りと子どもたちとのふれあいが笠木小学校には結構たくさんあります。畑作業のときなど自分の孫に『おまえ、何やってんだア』なんて、先生そつちのけで怒鳴りつけたりする。ばあちゃんたちは親と違つて遠慮なしだから何でもすげうけ言う。それがまたいいんですよ」と長谷川さんは楽しそうに笑いながら話す。そして「教室で本を読んで聞かせるのもいいかもしれないが、子どもたちは直接体験する中でいたわりや助け合うことを学んでいくのではないか。田植えのときなども上の子は小さい子に教えていますからね」と言う。

校長先生は「生き物を育てる、ものを作るといふこ

とはそのものを大事にする。そういうところから田んぼや畑の活動を道徳と関連づけながら、最終的には子どもたちが人間どうし仲良く助け合う道徳的実践力を高めていくことを目指しています」と話された。

笠木小学校は来年度の2、3年生が複式学級となる。少子化や、笠木小の学区だったM地区がU小学校（児童数700人余）との共通学区（希望でどちらの学校に入学してもよい学区）となったこともあって、笠木小へ入学する子がだんだん少なくなってきた。「時代の流れで仕方がない面もあるが、それに備えて昨年から資料を集め複式学級のための教育課程を準備している」と校長先生は語る。

いま進められている教育改革や学力重視政策で超多忙化している中で頑張っておられる笠木小学校の先生方を心から応援したい。そして、これからも笠木小学校のように、地域と密接に連携した教育を進める学校が、学校統廃合の波に流されることなく存続するよう期待したい。

（こいたくにお、こじまとしお・所員）